

令和 6 年 5 月 15 日現在

機関番号：14503

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13292

研究課題名（和文）中等教育脱落者の少年少女と社会参加 - インド・スラムにおける仲介者の働きに着目して

研究課題名（英文）School-dropout in Secondary Education and Social Participation: Roles of the Intermediators in India's Urban Slums

研究代表者

茶谷 智之（Chaya, Tomoyuki）

兵庫教育大学・学校教育研究科・講師

研究者番号：20824808

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、デリー全体の中等教育の動向として、中等教育進級者の約半数が修了試験ではなく前期中等教育の1年目で中退する傾向があることを資料調査により把握した。その上でフィールドワークを通して、調査地のスラムに暮らす若者には1年目で中退せずに進級する若者や、中等教育を修了して仕事を始めている若者も多数いることが明らかとなった。そこにおいて中等教育段階での進級や修了という学歴、中等教育段階で選択するコースが若者の職業選択の構想と深く関連していること、中等教育学校で広がる友人関係を通して初等教育段階で脱落したスラムの若者とは異なる生活世界を作り出していることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、社会的な排除の対象とされる傾向がある都市スラムの若者が、政府の学校や教師、中間層家庭の友人に対抗や抵抗するのではなく、中等教育の学歴や経験、そこで生まれる友人関係を参照点としながら補完的な関わりを通して自らの社会参加を模索していることを提示することができた。その成果は、難民や移民、都市貧困層などに対する排除が強まり、権利が権利として保障されていない人々の増加する世界各地において、マイノリティにとって重要な生の基盤が、若者の通う中等教育との関わりの中で生成されている実態を示す研究となる。

研究成果の概要（英文）：The study identified a trend in secondary education in Delhi as a whole by analysing government documents and information. About half of those who enter secondary school drop out after the first year of secondary school, rather than after the final examination. The fieldwork revealed that many young people living in the slums in the study had not dropped out after the first year of secondary school and had started working after completing secondary school. The study also showed that academic qualifications from secondary school and the courses chosen in secondary school are closely linked to slum youth's perceptions of their career options, and that the friendships formed in secondary school create a different life world from that of slum youth who dropped out of primary school.

研究分野：地域研究

キーワード：インド スラム 中等教育 社会参加 仲介者

1. 研究開始当初の背景

従来の南アジア教育研究では、社会問題や開発課題として注目が集まるトピックを検討する傾向にあった。初等教育から脱落するメカニズムに関する研究や、高学歴失業者に関する研究である。しかし、いま社会の関心が高いのは、中等教育脱落者の社会参加の可否である。2000年以降のインドでは、誰もが初等教育を修了できるようになったものの、高等教育までたどり着けるのはその四分の一程度であるからだ。そこで、先行研究では看過される中等教育から脱落した少年少女の社会参加の実態に着目する必要がある。

とりわけ不利な状況にあるスラムの若者たちは中等教育から脱落した後、誰かに頼りながら社会参加を遂げていくことが想定された。そこで南アジアの仲介者に関する研究を調べると、従来の仲介者研究は、不利な状況の人々と国家や企業をつなぐ政治的仲介に関する研究が主流であった。村民と政府との交渉を支援する高学歴失業者や、スラムへの電力供給をめぐる電力会社と交渉する住民リーダーに関する研究である。これらが示すポイントは、不利な状況の人々にとって、政府や企業とのつながりを生み出すノウハウをもった仲介者の役割が重要であるということである。そこでスラムの若者にとっての仲介者とはどのような人物なのか、若者の社会参加において仲介者はどのような働きをしているのかなどに着目する必要がある。

2. 研究の目的

本研究は、インド・デリーの都市スラム地域において、中等教育から脱落した若者が、社会参加を模索するプロセスを描写・分析した。具体的には、スラムに暮らす若者にとって中等教育学校とはどのような場になっているのか、スラムの若者の職業選択に関する実態やその構想に中等教育の経験はどのように関連しているのか、そしてスラムの若者が中等教育の経験を経ることによって生活世界がどのように変化するのかを具体的に描写した。それを通して中等教育脱落者にとっての仲介者の働きを明らかにすることが目的であった。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために本研究では主に参与観察を中心としたフィールドワークを実施する予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、渡航制限があったため、制限期間中は主に文献調査、資料調査を行なった。

文献調査としては、南アジアに関する教育研究、若者研究、仲介者など幅広く文献調査を行なった。またオンラインで手に入る学校情報、中等教育修了試験結果等の情報を収集し分析を行なった。

渡航制限解除後は主に参与観察とインタビューによるフィールドワークを以下の通り実施した。

(1) 2022年8月にインド・デリーにてフィールドワークを実施した。

まず調査地であるスラムに暮らす若者本人の属性や特徴、保護者の就業状況や家庭環境、カリキュラムや試験制度、クラスの友人や教師との人間関係など基礎的なデータの収集を行なった。また当初、スラムに暮らす若者の中で中等教育脱落者を対象に調査を進めていたが、4(1)で示す通り、調査地のスラムでは中等教育の経験やその後の進路は様々であった。そこで中等教育の経験を有する若者を、中等教育学校在学中の若者、中退を含め中等教育の経験を経て就業した若者、中等教育を修了して高等教育に進学した若者に区分しながら、それぞれの外出時の行動選択や職業選択の様相、友人との遊び、進学や就業の状況等についてインタビュー調査及び参与観察を行なった。また学校関連資料の収集も行なった。

(2) 2022年12～1月にインド・デリーにてフィールドワークを実施した。

2回目のフィールドワークでは1回目のフィールドワークで調査を行なった若者以外にも調査対象を広げ、第1回目のフィールドワークと同様にインタビュー調査及び参与観察を行なった。また学校関連資料の収集も行なった。

4. 研究成果

(1) スラムの若者にとっての中等教育の場

中等教育は第1学年から第8学年までの初等教育段階に続く前期中等教育(2年)、後期中等教育(2年)の合計4年で構成される。中等教育段階に特徴的なのは、初等教育段階にはない修了試験が課され、留年の仕組みも導入されている点である。デリー全体の中等教育に関する政府資料によると、中等教育に進級した者の約半数が修了試験ではなく前期中等教育の1年目で中退する傾向があることを把握した。一方で調査地のスラム周辺にある政府立学校の中等教育修了試験通過率を調べると、どの学校も例年高い割合で通過していることが明らかとなった。これら資料調査で明らかになった点を踏まえながら実施したフィールドワークでは、調査地のスラムでは1年目で中退せずに進級する若者や、中等教育を修了して仕事を始めている若者も多数いるといった現実の複雑さを捉えることができた。そのため当初の調査対象を修正して、脱落者

を含めて中等教育の経験を有するスラムの若者を広く捉えることにした。

(2) 中等教育の経験を有する若者と職業選択

中等教育段階は初等教育段階にはない修了試験が課される。スラムの若者にとっては脱落する者も生まれる厳しい競争環境となる。そこにおいて中等教育段階での進級や修了という学歴、中等教育段階で選択するコースは、中等教育の経験を有するスラムの若者が将来どのような職に就きたいか、就けるのかといった将来を構想する参照点となる。具体的には、初等教育レベルの学歴で就業ができる職業群、中等教育の中でも前期中等教育段階修了レベルで就くことができる職業群、後期中等教育修了の学歴が必要な職業群といったように、構想される将来像は漠然としたものではなく、自らの学歴から選択できる可能性と限界を認識した具体的な職業選択の構想であることが明らかとなった。それらはフォーマルセクター/インフォーマルセクターといった二区分で雇用市場を捉える傾向にあるなかで、若者自身が捉える細分化された雇用市場の様相を把握することができた。

(3) 中等教育の経験を有する若者の生活世界の変化

中等教育の経験を有する若者本人の属性や特徴、保護者の就業状況や家庭環境、カリキュラムや試験制度、クラスの友人や教師との人間関係など、収集した基礎的なデータによると、厳しい競争環境となる中等教育において、スラムの若者が中等教育学校で出会うクラスメイトの多くは、試験を突破した中間層家庭の若者となることが明らかとなった。そしてそれらの若者と友人となることで、スマートフォンを使った遊びができる仲間を築くことにもつながっている。中等教育の経験を有するスラムの若者は、中等教育学校で広がる友人とのネットワークを通して自らの置かれた現状を認識し、初等教育段階で脱落したスラムの若者とは異なる生活世界を作り出しているのがあった。例えば、中等教育段階のスラムの若年女性は、洗濯や皿洗いなど家事の役割の一部を担いながら、外出した先で勉強や映画に関する話題、Youtubeの動画、人気の歌手や曲、ストリート・アートや誕生日ケーキ、英語や洋服など、中間層家庭の若者たちが共有している要素に触れ、取り込みながら生活世界を形作っている。このように中等教育の経験を有するスラムに暮らす若者にとって、中等教育学校で広がる友人関係が新たな生活世界と現状を仲介する重要な役割を果たしていることが明らかとなった。

以上の研究成果は、政府や企業、市民社会による支配や排除への若者の政治的対応や経済的対応に関する研究が主流であった従来の若者研究とは異なる。具体的には、社会的な排除の対象とされる傾向にある都市スラムの若者が、政府の学校や教師、中間層家庭の友人に対抗や抵抗するのではなく、中等教育の学歴や経験、そこで生まれる友人関係を参照点としながら補完的な関わりを通して自らの社会参加を模索していることを提示することができた。その成果は、難民や移民、都市貧困層などに対する排除が強まり、権利が権利として保障されていない人々の増加する世界各地において、マイノリティにとって重要な生の基盤が若者の通う中等教育との関わりの中で生成されている実態を示す研究となると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 茶谷智之	4. 巻 13
2. 論文標題 子どもの声への着目からモノの意味の再編へ—インドの子どもの権利擁護活動とソーシャルワーカーの役割	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 子育て研究	6. 最初と最後の頁 14-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 茶谷智之
2. 発表標題 少女の行動制約と家族 - インドの都市スラムに暮らす10代の外出を題材として
3. 学会等名 日本子ども社会学会第28回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 茶谷智之
2. 発表標題 現代インドにおける貧困層の若者と中等教育の意義—デリーの都市スラムの事例から
3. 学会等名 基盤研究B「不確実性の時代」の南アジアの社会変動 若者の社会対応を通じて」2022年度第1回研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Tomoyuki Chaya
2. 発表標題 Aspirations and Urban Life among Poor Youth in Contemporary India: Focusing on Going Out Experiences of Teenage Girls in Secondary Schools
3. 学会等名 42nd AJI Frontier Seminar
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 茶谷智之
2. 発表標題 スラムと人間開発 貧困層にひらかれた都市とは
3. 学会等名 東京大学大学院総合文化研究科(南アジア地域文化研究/専門英語)(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 茶谷智之
2. 発表標題 デリーにおける都市の「市民性」 スラムの若年女性と外出
3. 学会等名 南アジア地域研究推進事業国立民族学博物館拠点「社会変動と親密圏」班2020年度第1回研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Tomoyuki Chaya
2. 発表標題 Transforming Dependency in Urban India: Slum Dwellers in Delhi Gaining Access to Better Educational Opportunities
3. 学会等名 British Association for South Asian Studies Conference 2021(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Tomoyuki Chaya
2. 発表標題 Transforming Time in Urban India: Secondary Education and Female Teenagers in a Delhi Slum
3. 学会等名 The 12th International Convention of Asia Scholars(国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 茶谷智之	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 512
3. 書名 「期待と失望のはざままで生きるアジアの若者」佐藤史郎・石坂晋哉（編）『現代アジアをつかむ 社会・経済・政治・文化 35のイシュー』	

1. 著者名 茶谷 智之	4. 発行年 2022年
2. 出版社 玉川大学出版部	5. 総ページ数 263
3. 書名 「中等教育の壁—スラムの若者はどこに向かうのか」押川文子（監修）・小原優貴・茶谷智之・安念真衣子・野沢恵美子（編著）『教育からみる南アジア社会—交錯する機会と苦悩』	

1. 著者名 石坂晋哉、宇根義己、舟橋健太、井田克征、松尾瑞穂、茶谷智之、山本達也、和田一哉	4. 発行年 2020年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 296
3. 書名 ようこそ南アジア世界へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------